

船ども皆朽そこなはれたるよし聞召し享保のはじめ殊更に命せられてことごとく修理を加へらるかくて小納戸頭取松平伊賀守當恒仰を蒙り風濤あらしき日をえらび水主二十人餘にてこぐべきほどの船を品川より乗出し浦賀まで乗廻りこゝろみられしに歸り來りて紀の海をのりしにくらぶれば日和よく風なきたるがごとし然し今の御舟は其製よからず便あしきよしを申ければさらば紀の海にて鯨とる舟のかたち擬して作るべしと仰下されやがて製造成て海上を乗試しにいかなる風波の中を往來しても陸地に坐するがごとく穩にして、まかも便利なりしかば此舟あまた作られしに本所のあたり洪水のときたゞちにこの舟こぎ出て溺るゝものを救ひし事あげてかぞふべからずかねて武備の用にあてられんとて造られしかどまのあたり不虞の用に立しとぞ

〔鯨船打直并鞘御修覆書留〕鯨船打直御修覆仕様

一 鯨船 先丸 上口長七尋 貳尺 壹艘

上口中六尺八寸  
數同貳尺貳寸

但 艦八挺立 略 中

六月 〇寛政

〔堀川後度狂歌集 六〕船

七ふしぎおりくる越の海原に油をとれる鯨舟あり

〔運歩色葉集 字〕鵜舟 六月

〔倭訓栞 中編三〕うぶね 鵜舟也うかひぶねに同じ西土の書に、鷓鴣船と見えたり舟の造り高瀬

舟に同じ

〔和漢船用集 五〕舟名數江湖川船 鵜飼 獵船の鵜飼舟にあらず美濃國白石と云所の舟なり旅客を